

「あのう、すみません。日本の方ですか？もしよかったらヤキトリ、つきあってもらえませんか？」

「えっ？」僕とツヨシは声の主に振り返った。

□

その日、僕とツヨシはサンミッシェルにいた。いつも学食ばかりで飽きていたので、サンミッシェルにでも行ってギリシャのサンドイッチでも食べようということになった。

値段は安い。ボリュームもある。そして文句なく旨い。金のない僕たちにはクスクスとともに外食の定番だった。

いつものようにまるで飢えた狼のように僕たちは近くの教会の塀にへばりつき、中身が落ちそうになりながら貪り食っていた。その日のサンミッシェルは大勢の人で溢れていた。思えば金曜の夜だった。多くの観光客に混じり、僕たちのような暇をもてあましたパリの若者がうろうろしていた。

□

ツヨシとはその前の年、TOURSの語学学校で知り合った。知り合ったとはいってもなんとなく顔を見かけたという程度だったし、一度も話したこともなかった。それがパリに出て来てそう日もたたない頃、モンパルナスの裏街のメトロの出口近くのカフェでぼったり声をかけられたのだった。

「自分、ツールにいたんとちゃう？」

「ああ...。」と僕はその間のぬけた顔を思い出した。

話すうちに僕のすぐ近くに住んでることがわかった。僕よりも随分と前にパリに出て来たらしい。そんなこともあって、以来、やつはちょくちょく僕のところにフラッと来るようになった。

「自分、なにしてはる？暇とちゃう？どっかいかへんか。」とか言っ

あるときは外資系の航空会社のスチュワーデスだというちょっと遊び人風の女を連れてきて、僕の耳元でささやいた。「ねえ自分、ちょっとうらやましいやろ。いいネエちゃんやろ。きのうさ、ちょっと酒飲んでるところで知り合っ

ツヨシは京都のパン屋の倅だ。何ヶ月かフランス語の勉強のためツールに行き、その後ちゃんとしたパリのパン学校には入ったものの、その厳しさについてけず、今は毎日パリでうろうろしている。“強”とは名ばかりで、その名に反して、ひょろっとして、なよっとした顔はいつも青白く、耳には大きなイヤリングをぶら下げている。飲むとその顔は真っ赤になる。

その日もやつがいつものように、「ねえ自分、どこか食べにいかへん。」とやって来たのだ。

パリに不思議と関西弁はよくなじむ。  
おおむね関西からきた人間はすぐにこの街に溶け込む。どちらかといえば東京組はちょっとシャイで友達なんかもできにくい。  
でも何で関西人は二人称に”自分”という一人称を使うのだろう。

僕とてやつと大きな違いはなかった。大学に行ってるとはいえ、書きかけの論文は一向に進まず、なんとなく毎日ぶらぶらしてる人が多いのだから。

気があったのかもしれない。その日のように二人で街にくりだすことがしばしばだった。

□

「ヤキトリ、連れて行ってもらえませんか。私たち初めてだし、注文の仕方もわからないし。もちろんお礼にご馳走しますから。ねえよかったら.....」

声の主は背の高い、今思えばちょっとオバマに似た理知的な男だった。連れ的女性も上品で身なりもきちんとして、やさしそうな目をした人だった。

僕とツヨシはほうばっていたサンドイッチを握り締め、目と目を合わせた。  
「どないする？」とその目は言っていた。  
「決まってるじゃないか。うまい話には必ず落とし穴があるんだ。ここはパリだぜ。行こう行こう。ちょっとやばいんじゃない？」  
「でも、ええ人たちに見えるよって、いいんとちゃう？ それに、しばらく日本食たべてへんやろ。おごってくれるって言うんだからええんとちゃう？」  
「でもさあ.....」

そんな僕たちのやり取りをニコニコしながらながめていた声の主は、  
「どうぞ心配しないでください。わたしたちは怪しい者ではありません。ただ本当にヤキトリを食べてみたくて、あなた方に助けてほしい、それだけなんですから。でも、もうそのサンドイッチでおなかはいっぱいですか...。』

確かにその言葉に嘘はなさそうだった。この国にいて、自然に身についた警戒心のセンサーも今回ばかりは僕には大丈夫といているように思えた。

そしてツヨシに言った。「行くか。」  
食べかけのサンドイッチはバックに放り込んで、僕たちはすぐそばの”やきとり”という名の焼き鳥屋に向かった。

金曜の夜にもかかわらず、幸いなことに四人掛けのテーブル席が一つ空いていた。いつも込んでいるこの店では奇跡にちかいことだった。

テーブルに着くと、とりあえずメニューの説明。コースが3種類ある。この中から選ばいいんじゃないなどと他人事のように適当に言う。

「わかりました。それではこれを注文しましょう。」  
ウェイターを呼ぶと彼は一番高いコースを4人前たのんだ。横目でツヨシを見ると、やつはもうよだれが飛び出しそうな顔を、なんとか理性で真顔に保とうと必死だった。根はまじめなやつなのだ。

焼き鳥が一本づつ順番に出てきて、ひと通り焼き鳥のことや“日本食”の説明が終わると、話は自然と自己紹介見たいなものになっていった。

「お二人は学生さんですか？」  
「ええ、まあ。。」と僕。  
「僕はパンの修行をしています。」とやつ。嘘付け。  
「それであなたはどんな勉強を？」  
「ええ。まあ。なんというか。比較文学というか、一般文学というか、まあ、ええ...そんな感じです。」と僕はたどたどしい。

「私は、リセでスペイン語を教えている教師です。この人は私のフィアンセです。」と隣に顔を向けて言った  
そのフィアンセの彼女は物静かで、食事中もただただにっこりとしながらうなずいたりしていた。この国の女性には珍しいタイプだった。

話は弾んだ。そして本当に怪しい人たちでないことはすぐにわかった。月並みな言い方をすれば、“いいひと”達だった。

□

食後のコーヒーの段になって、彼がおもむろにこう話を切り出した。まるで襟をただして改めてといった感じで。

「実は、私は日本語を勉強したいと思っているんですよ。」  
「えっ？」

「いえ本当です。そして以前から日本語を教えてくれる人を探していたのです。そこで相談なのですが、もしよかったら私に日本語の家庭教師をしていただけないでしょうか。もちろん授業料はきちんとお支払いします。まあ薄給なのでそんなに多くはおだしできませんが。どうでしょう..。あなたにお願いできないでしょうか..。」と僕に向かって言った。  
ツヨシに頼まないところに人を見る目があるなどと考えながら、僕はどうかとすぐには答えることができなかった。

ゆっくりとコーヒーを飲みながら、僕は決心した。

「やりましょう。いえぜひやらせて下さい。僕も勉強になりますから。」  
「そうおっしゃっていただけたらと思っていました。さっき初めてお会いしたときから。」

「僕の名前は\*\*\*\*\*といます。\*\*\*と呼んでください。そして TUTOYER で話しませんか。」

「オーケー。そうしよう。\*\*\*。ありがとう。」そう言って彼は手を差し伸べた。

「僕の住所です。早速来週からでもいいかな？」と言って、小さな紙切れに15区の住所を書いて僕によこした。それから簡単に打ち合わせをして僕らは席を立った。帰り際、「さっきも言ったけど、授業は会話中心でね。読み書きはとりあえずいいんだ。とにかく話せるようになりたいんだ。それだけは忘れないでほしい。」と。

僕ははっきりとうなずいた。「わかったよ。覚えておく。」

「では来週待ってるよ。\*\*\*ボンウィークエンド。ええと…」そこで彼は言葉に詰まってしまった。僕は「ああごめん。こいつはツヨシっていうんだ」

「悪かった。ツヨシ。今日は楽しかったよ。ありがとう。」と彼。ツヨシはいまにもゲップをしそうになりながら、「いえいえ、いいんです。ごちそうさまでした。」とぴよこんと頭を下げた。

「じゃあ」と言いながらもう一度振り返ると、笑顔で手を振る彼の横で、にっこりと彼を見つめるフィアンセの姿がなぜか目に焼きついた。

□

週があけた火曜の夜。僕は彼のくれた紙切れを片手に、メトロ CONVENTION の駅を出た。住所はすぐにわかった。ここならうちから歩いてもそう遠くない。次はうちから直接くるときは歩いてこよう。

約束した時間より少し早かったので僕はもう一度彼との話を思い出していた。このあいだ焼き鳥屋で決めたことはこうだ。一回2時間。週2回。一回の授業料は50フラン。僕には50フランは魅力だった。

そのアパートはけっして高級ではないけれど清潔な感じの建物だった。エレベーターもちゃんとある。彼の部屋は3階だ。ようやく見つけた彼の部屋のインターホンを押すと、中から「いま開けるよ\*\*\*」

扉が開くと中から楽器の音色。フルート！？「やあよく来てくれたね。さあ入って入って。」と言うと僕を招き入れた。部屋はワンルーム。想像してたより狭い。驚いたのは先客がいたことだった。その先客はローティーンと思われる女の子。そして彼女の手にはフルート。譜面台の前に立っていた。僕に顔を向けると一言「こんばんわ」と言ってまたフルートを吹き始めた。気がつけば彼女の手にもフルートが握られていた。??

「\*\*\*ちょっと待ってて。もうすぐ終わるからね。」と言って彼女の横に立ち譜面を見る。

十分ほどして「じゃあまた。」とフルートを片付けると、僕にもさよならを言って少女は帰っていった。

「驚いたかい。僕はアルバイトでフルートをここで教えているんだ。どうだかわいい子だ

っただろ。今の子。こんど誘ってみろよ。」とウインクした。彼の冗談を僕は初めて聞いた。ああそうなんだあ。学校でスペイン語を教える以外にも、フルートの個人教授をやっているんだ..。

生徒は全員で10人ぐらいになるらしい。彼のもう一つの顔を知ってちょっとまごついていると、彼は熱いコーヒーを入れてくれた。笑顔で僕を見つめると、「さあ始めようか。」

さっきまでは先生で今からは生徒なんだと訳のわからないことを考えながら、僕は昨夜、徹夜で考えた方法で授業を始めた。僕にとっては生まれて初めての”日本語教師”だ。

緊張していた。喉がかわく。時間はあっという間に過ぎていった。

「じゃあ、今日はこの辺でやめようか。」と彼は言うと大きく背伸びをした。

僕は少し疲れていた。うまく出来たのだろうか。彼は満足してくれたのだろうか。僕にとっては母国語である日本語を教えるというのがこんなに難しいとは思わなかった。そんな僕の気持ちを察してか、教師としてはプロである彼は、「\*\*\*よかったよ。とっても楽しく勉強できたよ。勉強は楽しくやれるのが一番さ。本当だよ」と言って僕の肩に手をやった。

僕は嬉しかった。初めての授業、やっぱりすごく緊張していたのだ。

「じゃ僕はこれで。次は木曜日だね。同じ時間に来るよ。」と言って帰り支度を始めると、「夕飯、一諸に行かないか。近くに安くて旨いシノアがあるんだよ。」と言うと、急ぎ立てるように僕を連れ出した。

中華料理屋は果してすぐ近くにあった。居心地のよさそうな店だった。彼は常連らしく、出迎えた店の主人は、中国訛りのフランス語で彼の名を呼びながら「やあ、いらっしゃい。」と僕たちを席に案内した。

好き嫌いはないからと注文は彼に任せて、僕は数時間前からの出来事を反芻していた。

「どうしたんだい？」と彼は笑いながら赤ワインに口をつけた。

酒の苦手な僕は、お茶を飲みながら、「いや。なんでもないよ。」と答えるのが精一杯だった。彼はどうやってフルートを学んだか、そんな話やたわいもない話をウィットをまじえて話す。僕の気持ちは少しづつほぐれていった。そしてなんだかわからないけれど、今日はよかったなあと充実感が湧いてきた。

2時間近くかけた食事は彼の言葉に偽りはなく本当に旨かった。そして驚くほど安かった。彼が勘定を払い席を立つと、僕は自分の分は払うからと言ってポケットに手を突っ込んだ。彼は首を横に振って、「今日はいいんだよ。新米教師の誕生のお祝いなんだから。」と言って店を出た。

「じゃあまた。」「また木曜日だね。おやすみ。」僕達は店の前で別れた。

こうして僕の家庭教師は始まった。

いつも僕が着くと彼はフルートを教えていた。そして必ず日本語の授業が終わると、なんだかんだと理由をつけて僕を食事に誘い、そしてなんだかんだと理由をこじつけて僕におごってくれるのだった。

「今日は僕が初めて日本語で挨拶が出来たお祝いだ」とか  
「今日のオレのニホンゴは、まるでオンダのバイクのようにスリリングだった。乾杯しなきゃ！」とか。

□

そんな僕たちの関係が一ヶ月余り過ぎようとする頃、いつものようにいつもの店で僕達はテーブルを囲んでいた。

酒がだめな代わりコーヒー好きの僕が二杯目のエスプレッソを頼んだ頃、僕は今まで聞いてみたかったことを、そして彼の口からは一度も聞いたことがなかった事を尋ねてみようと決心した。そして  
「ねえ、前から聞きたかったんだけど、なんで日本語を覚えたいの？」

その瞬間、彼の表情は一変し、じっと遠くを見つめて黙ってしまった。しばらくの沈黙が続き、そして彼は言った。

「いつか話さなきゃとは思っていたんだ。」そこまで言うと言言葉を切り、また遠くを見つめるように視線を僕からそらした。僕は何か聞いてはいけないことを言ってしまったのかと後悔した。

数分の時間が過ぎた。

「そんなたいそうな話じゃないんだ。だから気楽に聞いてくれよ。」と何かを吐き出すように話し始めた。

□

彼の話のを要約すればこうだ。

十年程前、ロックコンサートの幕間に一人の日本人の女性と知り合った。わずかな時間の中で意気投合し、コンサートが終わったら近くで一杯やろうということになった。そしてその言葉どおりコンサートが引けた後、二人は近くのカフェのテラスにいた。そしてまた会うことを約束した。

こうして二人の付き合いは始まった。少しずつ二人は惹かれあっていった。そして二人は恋に落ちた。そして一緒に暮らし始めた。

幸せな日々が続いた。

季節が一巡りする頃、二人の間にかわいい女の子が生まれた。幸せな日々はいつまでも続くものだ二人は信じていた。そう永遠に。

しかしそんな二人に神は試練を与えた。

日本にいた彼女の両親が、二人、いや三人のことを知り、パリにやって来た。

そう彼女は彼のことを両親には黙っていたのだ。そのことを知った彼女の両親は、彼女を日本に連れ帰ろうとした。もちろん子供も一緒にだった。

彼女は懸命に抵抗した。泣き叫んだ。

彼は一生懸命に、どんなに彼女のことを愛しているか。そして彼女と二人の間に生まれた子を必ず幸せにすると、せつせつと語った。説得した。懇願した。でもだめだった。

彼女は両親と日本に帰って行った。ナオという名の女の子も一緒に。帰り際、彼女の父は彼に約束させた。二度と二人に会わないようにと……。

□

僕は言葉が見つからなかった。こんなときに気の利いた一言もいえない自分が情けなかった。

「それで…」と彼は言葉を続けた。

彼女の両親とは約束した。いや約束させられた。でももし神様がいるならばいつかきっとまた会える時が来るかもしれない。そうきっとあえる日が来ると信じていた…。

しかし二年が過ぎた頃、彼の元に一通の手紙が届いた。彼女の父親からのものだった。「娘は結婚した。子供も元気に成長してる。だから君も安心して生きて行って欲しい。」そんな内容の手紙だった。

そこまで話すと、彼は大きく一呼吸した。その時僕はすべてがわかった。彼が日本語を習いたいと言う理由を。そうに違いない。きっとそうだ。いつの日か彼が娘のナオに会えたとき……、きっと日本語で話しかけたいのだろうと。そのために、だった。

読み書きは知らない。会話だけでいい。わかった。。

そして彼のフィアンセはこの話のすべてを知っている。わかった。。あの焼き鳥屋でやさしく微笑んでいたわけが。

今の彼女は心から彼を愛している。。。

僕は残っていたコーヒーを飲みほした。いつになく苦い味がした。

□

「\*\*\*スキーにいかないか。そうだスキーと一緒にいこうぜ。なあ\*\*\*」

彼が唐突にそんなことを言った。そう言えばもうそんな季節だった。でもフランスでスキーなんてしたことはない。それにスキーはへただ。ウェアもない。

「ねえ。決めたぞ。一緒に行くんだ\*\*\*。板は向こうで借りればいい。着る物は俺のを貸すから。心配するな。」

話はこうだ。

彼のリセのスペイン語のクラスでスキー合宿があるらしい。一応授業の一環で引率者にはわずかだが日当も出るらしい。だから僕を臨時引率者として学校に申請するから、金の心配は要らない。場所はピレネー。

う～ん。アルプスの高級リゾートじゃないところにちょっとひかれた。そして話は勝手に決まってしまった。僕はリセの臨時引率者として30人もの生徒と、そして本物の教師である彼とピレネーに行くことになった。

二週間後のことだった。

□

その朝、パリの空はいつになくどんよりとして寒かった。白い息がタバコの煙と同化して空に舞い上がった。

メトロの入り口でツヨシに会った。「どこ行くねん。自分。こんなに早くさあ。」

僕はただ「スキー」とだけ答えるとメトロの改札へと急いだ。階段の曲がり角で上を振り返ると、やつはおおきなあくびをしていた。

また夜遊びしやがって。朝帰りにちがいない。

□

ピレネーの日々は、はちゃめちゃだった。

何がって。まず宿舎は二段ベットの大部屋。大騒ぎのリセエヌ達は、シャワーを浴びてもそのまんまの姿で僕の前をうろちょろ。まったくくよお。

ゲレンデではへっぴり腰の僕を見てみんなで大笑い。くそお。

そして夕食の後は、歌い、踊りまくる……。

輪の中心で、彼はフルートを吹いていた。

楽しかった。 本当に楽しかった。

□

月日は流れ僕は実家の事情で急いで帰国しなければならなくなった。論文はもちろん未完成。本当のところもう一年いたかった。

帰国後、目まぐるしく移り変わる現実に対峙するなか、僕の住所は定まらなかった。

そしていつの間にか、スペイン語の教師の彼とも音信が途絶えていった。

□

あのツヨシは京都に戻り、パン屋をついだらしい。

風の便りだった。

\* すべてフィクションです。登場人物など仮に似た者がいたとしても、それはまったくの偶然にすぎません。